

2025年11月16日 第二礼拝 召天者記念礼拝

説教題『命の対話』イザヤ書55章8～11節、ヨブ記19章25節

主任牧師 加藤 誠

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。」(イザヤ書55:10)

「わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。」
(ヨブ記 19:25)

毎週の礼拝に小さな子どもから高齢者まで多様なバックグラウンドを持つ人々が集い合う教会は実にユニークな共同体です。先週は子ども祝福式で、今日は召天者記念礼拝で「命のはじめと終わり」を見つめる機会をいただき、聖書から神さまの語りかけを聴く。コロナ以降の日本では家族葬がすっかり主流になり、若い世代が人の死に触れ、死について考える機会がめっきり少なくなりましたが、教会に来ると、親に抱かれた赤ん坊の傍らに、齢を重ねて体力が弱りながらも礼拝に集い続ける人生の先輩の姿を目の当たりにし、そして誰もが必ず迎える死について聖書から聴く。今やスマホがあれば何でもリモートで成り立つデジタル時代に、毎週日曜日に集まり、お互いの顔を合わせて一緒に賛美歌を歌う、実にアナログで、時に面倒くさい教会という共同体の存在意義はユニークでますます大切になっていると感じています。

その教会という共同体を形づくっているのが聖書の力です。この聖書は今から約二千年以上も前の書物でありながら、21世紀を生きる私たちの心を解き放つ力をもっています。例えば、創世記に書かれている主なる神とアブラハムの対話は実に興味深い。年老いたアブラハムはつぶやきます。「後継ぎとなる子もなく、一步の幅の土地さえ持つことなく、まもなくわたしは空しく死のうとしていいる」と。すると神はアブラハムを天幕の外に連れ出して「天を仰いで、星を数えてみよ！あなたの子孫は、このようになるのだ！」と語りかけるのです。私たちは「自分の家、自分の財産、自分のこと」に心をからめとられてほんとうに狭い世界しか見ていないし、見えていない。そして、ため息をつく。そんな私たちに神は宇宙規模の大きな世界を見せて「あなたを生かすわたしの力を信じなさい！」と呼びかけられる。自分のことに小さく固くなっている私たちの心を、聖書は神の大きな世界に向けてやわらかく広げるのです。

聖書が書かれた時代に比べて私たちは格段に進んだ文明を手にしてしています。小さなスマホ一台に昔のコンピューターが何十台も入っているような文明の力を手にしている。にもかかわらず、視野はますます狭く、心はますます小さく、自分のことしか考えられず、固くなりつつある私たちに、聖書はすべての造り主である神と対話しながら、心を大きくのびやかに広げて「神の恵みの中を共に生きよう！」と招くのです。

『死ぬ瞬間の五つの後悔』（ブロニー・ウエア著）は、余命宣告を受けた終末期の患者さんを在宅でケアするブロニーさんが、出会った方々との対話をまとめたもので

す。明るく前向きで、やさしく寄り添うブロニーさんに、患者さんたちは心開いて人生を語り始めます。彼らが心痛みながら語る後悔は「もっと自分に正直に生きればよかった」「働き過ぎなければよかった」「思い切って自分の気持ちを伝えればよかった」「友人と連絡を取り続けければよかった」「幸せをあきらめなければよかった」というものです。ざっくりとまとめるなら「その時その時に、第一にすべきことを第一に大切に選べなかった後悔」として響いてきました。例えば、仕事やお金は大切ですが、愛する家族や友人との時間はもっと大切。また私たちは人生はまだ長いと思いがちだけれど、実は時間は私たちの手の中にはない。今できる時に、できることを心込めて大切にすべきだった…などなど。それらの対話を読みながら考えさせられたのは、人生を振り返って後悔しない人はいないということ。失敗や挫折と無縁な人がいないように、後悔のない人はいない。人はさまざまな後悔を抱えて生きている。ただ、その後悔や苦悩を打ち明けることのできる相手を一人でも見いだせた時、人は人生を再定義して前を向くことができる。患者さんたちにとってはブロニーさんがその対話相手になったわけですが、一方、明るく前向きに生きてきたはずのブロニーさん自身も、彼女が燃え尽きて一歩も動けなくなった時に、その彼女を救ったのは、自分を信頼して語ってくれた患者さんたちとの対話でした。実は彼女自身も幼い時に受けた心の深い傷を抱えて生きる一人であり、癒しを必要とする一人だったのです。

私たちは「過去」を変えることができません。それゆえに「過去」に負った深い心の傷、後悔、憎しみや憤りなどを克服することができず、それらが大きな心の重荷となって私たちを苦しめます。その私たち一人ひとりの傍を歩み、その苦悩を受け止めて「命の対話」に導く方として、さらには「罪を贖う方」として主イエスは来てくださいました。「贖う」とはもともと「奴隷が自分では解けない鎖を解かれて新しい歩みを始める」ことを言います。私たちの人生は生きれば生きるほど汚点にまみれ、罪を重ねるものではないでしょうか。が、私たちが自分では変えられない過去、自分の弱さ、醜さ、挫折、失敗のすべてを主イエスが十字架で引き受けて、「大丈夫、あなたは空しく天に戻ることはない。神の愛への感謝をもって、天から託された使命を大切に生きていきなさい」と宣言してくださった。罪から解き放たれて、神の恵みを生きる者とされる。これが聖書の「罪の贖い」です。主イエスによって私たちの変えられない「過去」は、希望に向かう新しい歩みに変えられていくのです。

ヨブは不条理の嵐が吹きすさぶ中に「わたしを贖う方は生きておられ、塵の上に立たれる！」と告白しました。神は、私たちの命の始まりに祝福を注ぎ、私たちの命の終わりに贖いをもって立っておられる。日々、私たちの歩みの前に神の祝福があり、背後に主イエスの贖いがあります。教会というユニークな共同体に集い、主イエスと命の対話を交わしながら、祝福と贖いに囲まれた人生を大切に歩んでいきましょう。